東久留米
教育委員会だより

第 49 号
平成28年（2016）
7月1日発行
編集発行　東久留米市教育委員会
〒203-8555東久留米市本町3－3－1
電　　話　042(470)7777

特集 The TEIDAN 鼎談 “スポーツ”で大きく成長してほしい！

～オリンピック・パラリンピックのレガシーを一人ひとりの子どもたちに～

来月、ブラジル・リオデジャネイロでオリンピック・パラリンピック競技大会が開催されます。４年後はいよいよ東京です。地元で開かれるオリンピック・パラリンピックは、子どもたちにとって重要な教育の機会となります。極限に挑むアスリートの姿に感動するとともに、国際理解・国際親善、そして社会貢献の大切さを体験的に学ぶことになるでしょう。

今号では、広くスポーツの振興について、特に「東京２０２０大会（第32回オリンピック競技大会・東京２０２０パラリンピック競技大会）」を通じ、子どもたちにどのようなレガシー（有益な遺産）を残したら良いか、市スポーツ推進委員の坂本さん、オリンピック・パラリンピック教育を進めている市立南中学校の川上校長、部活動顧問をしている市立西中学校の尾石主幹教諭の３人に話を伺いましたので（４月26日・市役所で）、その概要をお伝えします。

市の現状は…

～子どもたちの体力とスポーツへの関心度は低いのか

○司会　二極化していると言われる、子どもの体力やスポーツ活動についてどう思っているか。

○尾石　やはり、外で遊ぶ「場」が制限されていることが影響しているのではないか。中学生がボール投げをしていると、「ボールが家に入る」「車に当たる」等の苦情の電話が、たまに学校にある。大きな広場やグラウンドなどの開放した場所も整備されてきているが、学校での部活動やクラブ活動をもっと充実させ、子どもたちが運動できる場をつくることが必要だと思う。

○坂本　同感だ。広場はあっても「ここで遊んではいけない」等の看板が多過ぎる。「体力がない」「スポーツをしていない」という対策の前段として、先ずは、子どもたちが日常楽しく、外で遊ぶことができれば改善されていくと思う。

○司会　平成27年度の「東京都児童・生徒体力・運動能力、生活・運動習慣調査」によると、上体起こし、50ｍ走、ハンド（ソフト）ボール投げなど9項目の体力合計が、南中学校は都の平均を全項目で上回り、さらに、各学年の男女ともほぼ全国平均を上回っているが。

○川上　本校の状況を見ると、二極化については果たしてそうなのかと思っている。

調査結果によると、都の中学校全体では一日の運動やスポーツの時間が、学年進行とともに減っている。一方、本校では、体育の授業以外にも自分から運動やスポーツに取り組んでいる生徒は1年生69・3％、2年生71・9％、3年生76・2％と上がっている。

○坂本　正直、意外という感じを受けた。どういうことが考えられるのか。

○川上　本校ではオリンピック・パラリンピック教育を、特色ある教育活動に位置づけて取り組んでいる。学校体育が大切にすべき、「子どもたちに運動する楽しさを味わせること」や「運動する意味や価値を理解させること」が上手く進んでいるのではないか。

○尾石　西中学校でも学年が上がるにつれ、体力合計点は大きく伸びている。環境は恵まれており、放課後はほとんどの生徒が部活動をやっている。学校を挙げて「運動する」という雰囲気ができていると思う。

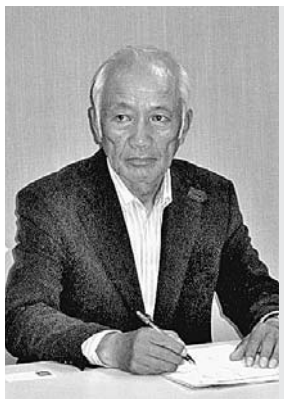
○司会　本市の場合、学年が上がるほど、運動が大切であるという意識が高くなるようだ。

○尾石　「場の提供」には生活指導の面も考えなければならない。放課後に好ましくない所に集まるようになり、スポーツや運動しない遊びの方向に走ることも考えられる。スポーツの楽しさや大切さを理解させることの重要性が増してきた今、子どもたちには、「与えられた場に指導者がいて、その人を通じてスポーツの楽しさを味わせてあげる」のが良いと思うし、それは保護者も求めている。ただし、いろいろなことが自由に選択できる時代に、一方的に与えることの問題は別にあると思う。

○坂本　大人がかかわることはとても良いと思うし、必要である。テレビで、都内のある中学校のガラス張りの校舎を見た。校舎からも校庭からも、それぞれがよく見える造りになっている。市民に一般開放しようという内容だったが、夜間も利用できるので、一般市民のスポーツ活動率も上がり、子どもたちも地域の方と一緒にスポーツを楽しんでいた。そうなってくると互いによく知るようになり、まちづくりにも良い影響があると思う。「場」と「地域とのかかわり」が両輪になっている例である。

○川上　私も、場の提供だけではなく、そこにかかわる大人が必要だと思う。子どもたちに任せることも大事だが、それだけではうまく回らない。いつも保護者や教師が付き添えるわけではないので、地域の方の協力を得ることがとても大事になる。

スポーツにはルールがあり、公正・公平、規範意識や思いやりなどが求められる。大人がかかわりつつ、子どもたち自身の公正、公平、規範意識や思いやりを培っていければ、大人が時には見ていなくても、きっと、いい遊び、いい運動、いいスポーツができると思う。



坂本和弥（さかもと　かずや）　昭和18年生まれ。市スポーツ推進委員、市体育協会副会長、スポーツ少年団副本部長、市軟式野球連盟副会長、早朝野球連盟顧問。前回の東京オリンピックで聖火ランナーに選ばれ、国立ー国分寺間を走った。沿道の大歓声と、子どもたちにサインをねだられて驚いたことは今でも覚えている。長年にわたり、野球を通じて市のスポーツ振興に携わっている。

スポーツがもたらすものは大きい

～精神面でも良い影響がある

○司会　平成17～19年度に、西中学校ハンドボール部女子が全国大会で3連覇した時は、部員に相当なプレッシャーがあったのでは。

○尾石　子どもたちはハンドボールが先ずは好きで、勝ち負けはその次のステージでの課題なのだと思う。ふと、「そういえば、去年、先輩たちが日本一になったんだ」と思うかもしれないが、その重圧の感じ方は大人と違っているようだ。中学生だからかもしれないが、自分たちが成し遂げられるかどうかは、直線的にはつながっていない感じがする。「絶対に勝たなければいけない」という重圧とは中学生の場合は違う。スポーツを楽しんでやることが意識できているのではないかと思う。決勝戦に立てただけで、「うわーっ」と楽しくなるというか、子どもたちとそういう感じで進んできているので、緊張感なく、最後まで同じパフォーマンスが出せていると分析している。

○司会　中学生でトップの経験をしたら、燃え尽き症候群になりかねないのでは。

○尾石　厳しい練習もするが、ふだんの練習の中でも、楽しさを十分感じて試合に臨むという状況にしなければ、相当な重圧を感じてしまう。西中学校の卒業生たちの多くは、その後も楽しくスポーツを続けてくれている。オリンピックを目指している者もいれば指導者にも多くなってくれている。

○川上　アメリカでは、「エリートはフィジカルエリートでもある」と言われることがある。ハーバード大学では約２００人のオリンピアンを輩出している。しかし、東京大学を卒業したトップアスリートは極めてまれで、ましてやメダリストはいない。アメリカでは、どんなにスポーツが盛んな学校でも一定程度の勉強時間が確保されている。また、シーズンによって異なるスポーツをすることが可能な「シーズン制」になっていて、中学生、高校生、大学生は本当に多様な生き方をしている。ここから学ぶことはたくさんあると思う。

しかし、ややもすると、日本ではスポーツというとスポーツばかり、勉強というと本当に勉強ばかり。勉強も運動も一生懸命に取り組むという生き方の中に自分自身の価値観を見出せれば、燃え尽き症候群などとは無縁の生き方になってくる気がする。

○尾石　校内でのロードレース大会でも各自が目標タイムを設定してモチベーションを上げる取り組みを行い、運動が苦手な子どもも何とか完走しようという気持ちが備わり、最後にゴールした子どもにもみんなで拍手する雰囲気になっている。本来はスポーツや運動をしたくないとは思っておらず、ちょっとでも高まりたいという気持ちを持っているのではないか。

（2面に続く）

川上　智（かわかみ　さとし）　昭和38年生まれ。市立南中学校長。同校は平成27年度から都のオリンピック・パラリンピック教育推進校の指定を受けており、第三小学校とともに「子供の体力向上推進優秀校」の表彰を受けた。将来、国際社会で活躍する日本人を育成することなどを目標に、全教科でオリンピック・パラリンピックを題材にした指導計画を導入している。自身も子どもの時からサッカー、ハンドボールなどスポーツに親しむとともに、教員時代は部活動顧問として全国大会等で実績を残した。

尾石　智洋（おいし　ともひろ）　昭和48年生まれ。市立西中学校主幹教諭（技術科）。同校の男女ハンドボール部顧問。全国優勝６回【女子５回・男子１回】（平成17年度からの３年連続優勝含む）を成し遂げた。ＪＯＣ東京都選抜女子監督全国優勝２回（平成23・27年度）も果たしている。日本代表Ｕ16女子監督を経て、今年度から日本代表Ｕ16男女団長、日本ハンドボール協会の育成部長に就任。部活動を通じて青少年の健全育成を図るとともに、トップアスリートの育成を目指して活動中。